

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：12501
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2016～2019
 課題番号：16K17410
 研究課題名(和文) ラベル付けとテリトリー化：多様な教育環境でのアイデンティティ交渉に関する研究

研究課題名(英文) Labeling and Territorialization: Identity negotiation in diverse educational environment

研究代表者
 小林 聡子 (Shao-Kobayashi, Satoko)
 千葉大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：90737701
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、多様化する教育環境における文化的言語的少数派生徒のアイデンティティの交渉を通時的・共時的に明らかにするものである。平成16年から関連調査を行っているロサンゼルスに長期滞在する日本人(元)高校生と日系米国人生徒らと、新たにグアムの生徒らに焦点を当て、学内外におけるグループ識別に使う「ラベル付け(labeling)」と「テリトリー化(territoriality)」を主な分析対象とした。そこから、アイデンティティの位置取りにおける言語と空間の役割、特に人種民族地理と生徒間のラベル認識の関連、移動と制度設計の通時的影響、カテゴリーへの多声的・多場のアプローチについての明確化を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語と空間を介したアイデンティティ交渉が、どのように制度的、空間的設計の影響を受けるのかを明らかにしたことは、多様化が進む教育環境を整備する際、生徒たちが肯定的なアイデンティティや関係性を築くための教育計画や教育環境整備への示唆となったと考える。また、これまで教育学、言語学、地理学といった異なる分野において発展してきたアイデンティティ研究であるが、ケーススタディからより理論的なものへ発展させることができた点で、関連研究分野への貢献ができた。特に、学際的な理論や分析アプローチを用いて統合的に発展させることで、カテゴリーへの新しい研究的枠組み・観点の提唱へ寄与することができた。

研究成果の概要(英文)：From a longitudinal and sociocultural perspective, this ethnographic study examines culturally linguistically minoritized students' identity negotiation in diverse educational environment. The research is constituted of two main field research; one targeting Japanese and Japanese American (ex)students at a high school in Los Angeles since 2004, and the other with local high school students in Guam since 2016. I analyzed how participants recognized inter-/intra-ethnic boundaries by focusing on their labeling and territorialization practices. The study clarified the role of language and space in identity formation, particularly regarding its relation to racialized/ethnicized space, as well as the longitudinal impact of transnational mobility and educational systems. Summing the research findings, I proposed a possible research approach to an identity category focusing on concepts transvocality and translocality.

研究分野：教育人類学

キーワード：アイデンティティ 言語と空間 質的研究方法論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アイデンティティは他者との関わりの中で構築されるという見方が定説となり、数十年が経つ。トランスナショナルな人の移動の増加に伴い、アイデンティティもより複雑なものとして捉えられるようになった。これまで日本では「海外子女教育」の枠組みの中で、長期滞在児童らの受け入れ社会や帰国後の適応やアイデンティティに関する理論的・実践的な研究が数多くなされている(箕浦 1988; 渋谷 2001 等)。しかしながら、現地校での生活やアイデンティティの交渉に関し、観察に基づいて詳細にかつ長期的に追ったものは未だ多くない。また、アジア地域の外でアジア系住民が最も多い米国内においても、言語的文化的マイノリティ生徒を対象とした研究といえば、ラテン系移民や黒人生徒に焦点を当てたものが大半を占めており、「モデルマイノリティ」とされる日本人を含むアジア系に関する研究は非常に限られている。

研究アプローチが多岐に渡るアイデンティティ研究だが、インタビューなどの言語データを用いるものが多い中、「語る」という実践的行為であれ、「ラベル」のような象徴的価値であれ、アイデンティティ交渉における言語の役割が多く論じられてきた(Heller 1987 等)。一方、文化人類学や人文地理学などでは、人がどのように物理的な空間を自分の居場所として構築するのか、あるいは特定の場所に対する思い(例えば日系人が想像する日本)がアイデンティティ形成にどう影響を与えるかを論じてきた(Delaney 2002 等)。異なる分野で重要な発展を遂げてきたアイデンティティ研究の様々なアプローチであるが、これらをどのように学際的につなげていくのが課題として挙げられる。

代表者は平成 16 年からロサンゼルス市の公立高校にて、長期滞在日本人生徒らがどのように民族アイデンティティの位置取りをしているのか、主に教育学と言語人類学の理論と分析手法を用いて調査を行ってきた。まず、2 年間のエスノグラフィーを行い、その後平成 18 年からは、日本へ帰国した生徒や米国へ残った協力者に定期的に追跡インタビューを行っている。その結果は、以下のようにまとめられる。対象生徒らは、教職員や他の生徒達に「日本人集団」と認識されていたが、実際には幾つかのグループに明確に分離していた。彼らは日系人生徒らとの関わりの中で、メインストリームへの同化が理想だと意識し、英語学習授業のレベルが何か、英語の流暢さ、米国人の友人の有無など、幾つかの要素を基に同化の程度を判断し、グループ間で優劣をつけていた。特に、差異を具現化する方法が少なくとも 2 つある。まず「ジャップ」や「FOB (新参者)」などの「ラベル付け(labeling)」という言語使用であり、もう一つが校内に特定の居場所を作る「テリトリー化(territoriality)」という空間使用である。この 2 要素を関連付け、その空間自体を同化の程度を表象するものと認識していた。このように相互の差異を強調することで、図らずも「日本人」という自己認識が強化されていた。卒業後に日本へ帰国した生徒間では、「帰国」という新しいラベルを巡るアイデンティティ交渉をしていることが明らかになった。

上記のような先行研究及び代表者自身の研究成果に追跡・追加調査を合わせ、長期滞在日本人・日系人生徒に焦点を当て、人種・民族アイデンティティの位置取りにおける言語や空間の役割をより明確化する必要がある。また、これまで駐在員家庭の多いロサンゼルス市の地域に在住していた長期滞在者のみを対象にしていたが、多様性の状況が異なる国や地域においては別の現象が見られる可能性があることから、より調査対象を広げて比較検討をする必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、多様化する教育環境における文化的言語的少数派生徒のアイデンティティの交渉を通時的・共時的に明らかにするものである。特に、アイデンティティの位置取りにおける言語と空間の役割の明確化を行うことを目的とした。具体的には以下の 3 点に焦点を当てた。

- [1] アイデンティティの位置付けやグループ認識のために使用しているラベルやカテゴリーが何であり、それらが生徒らの社会関係・社会認識にとって何を意味するのか、その使用における異なる文脈の影響に着目しつつ、言語を介したアイデンティティ形成に関して明らかにする。
- [2] [1]のラベル付けや、グループ認識と関連して、生徒らのテリトリーを認識および日常的な空間使用を明らかにすることで、アイデンティティの位置取りにおける空間の役割を明確にする。
- [3] [1]と[2]のラベルやテリトリーの認識と使用が、物理的および制度的な設計とどのように相互に関連しているのかを検討する。

ここから、学際的な理論や分析アプローチの展開および批判的な質的研究方法の可能性を検討しつつ、多様な生徒を含む教育環境をどう整備していくことができるのか、実践研究への布石とすることを目的とした。

3．研究の方法

本研究は、教育学的理論に加えて、言語人類学（エスノグラフィー、会話分析など）と批判的地理学（概念的地図分析、空間分析など）における質的研究手法を取り入れながら調査を進めた。調査地は、ロサンゼルスに加え、日系人が多いグアムの高校でフィールドワークを行った（当初はハワイ州ホノルルにて調査予定だったが、諸事情によりグアムに変更した）。ロサンゼルスでは、調査校での参与観察に加えて、在校生 15 人（新規協力者）、帰国者を含む卒業生（2004 年からの継続協力者）10 名、教職員 3 名（2004 年からの継続協力者）へのインタビューを行った。また、新規調査地であるグアムにおいても 4 校の協力を得て、参与観察および教職員 3 名、在校生 18 名（日系 10 名、チャモロ系 8 名）とのインタビューを実施した。両校にて、授業などの校内の観察に加え、学外の遊び場、塾、さらに SNS 上の交流を含めて、生徒たちの日常会話と行動についてのデータを収集した。そこから、彼らがどのようなグループに分かれているのか、アイデンティティの位置取りに使用するラベルやテリトリーのデータ抽出をし、各地域における実態と特徴を明らかにした。

上記の調査を主軸としつつ、新たな方法論的検討を進めるため、国内の大学でも 30 名の調査協力者らと学内のグループおよび空間認識・行為について、アクションカメラを用いたパイロットスタディを実施した。

4．研究成果

（1）人種民族地理と生徒間のラベル認識

長期継続的調査をしているロサンゼルス現地校では、駐在家族の日本人生徒の急速な減少、現地育ちの日本人生徒の増加、またその他のアジア系生徒の増加の影響もあり、生徒らや保護者間の関係性や学内での位置づけが 15 年前からは変化していた。しかしながら、数年前の校内の改築に伴って学内の物理的設計がやや変わったものの、在校生へのインタビューによると「FOB」といったラベルに伴うテリトリー化の構造は変わらず、「日本人コミュニティ」内での詳細な差異化を通じたアイデンティティの交渉が継続されている。

一方、グアムでは「日本人」という概念・存在の社会的・地理的位置付けがロサンゼルス状況とだいぶ異なっていた。米国の占領下にある小規模の島は、チャモロ系住民、米軍基地関係者、韓国・中国・日系住民や観光客、近隣の島々からの移住者らが、地理的に分断した居住地域を

形成している。特に、それが社会経済的格差および学校間の質的差異につながっており、生徒らの言語的・空間的認識や行為もそれに基づいていた。例えば、「FOB」といったラベルよりも、「Tourists(観光客)」、「高校の生徒」といったカテゴリーが、人種や民族的指標性を含むだけでなく、社会経済的地位の指標とされており、その中で自分たちの位置取りがなされていることが明らかになった。

(2) 移動と制度設計の通時的影響

ロサンゼルスへの卒業生らへの調査からは、現地校に在籍中に教職員、保護者、塾講師、友人らとの関わりの中で培った人種・民族に関わるイデオロギーや実践が、彼らのアイデンティティの交渉や進路、就労において卒業後15年以上たった今も、国を超え、形を変えながら影響を及ぼし続けることが明らかになった。また、在学中の「日本人」生徒らの間では変わらずに帰国生受験が平準化されており、その点ではグアムの生徒らも差異はあるものの同じような傾向がみられた。ただ、日米の国家間移動により、現地校における日本人生徒間の言語的・空間的なアイデンティティのマイクロな政治的位置付けは、社会的立場や資源へのアクセスという点で大きく転換していた。そこには「帰国生」といったラベルが、教育制度上のカテゴリー、生徒らに想像される「帰国生性」、生徒らの実態と必ずしも合致しないことで生じる様々なアイデンティティの葛藤が指摘できる。

(3) カテゴリーへの多声的(transvocal)・多場的(translocal)アプローチ

(1)(2)で論じたように、生徒らは日々の生活の中で、教育制度といったソフト面や地理・物理的構造といったハード面の影響を受け、自分や他者のテリトリーやラベルを認識し、日常化し、それは共時的なアイデンティティや社会関係の複層性に影響していた。また、それは国家間の移動に伴う制度上の影響も受け、通時的なアイデンティティおよび社会的な機会・資源への影響が確認できた。このように言語や空間に関わる認識や行為について、より複雑なカテゴリーへの分析的観点が必要であることは明らかである。パイロットスタディという位置づけで実施された大学生との研究方法論に関する調査結果の検討も含めた上で、本研究の総括として多声性(transvocality)と多場性(translocality)に着目したカテゴリーへのアプローチを提唱した(当該論文は投稿中)。

日本に様々なルートの児童生徒らが増える中、複層的な観点からカテゴリーへアプローチすることが強く求められる。特に、言語と空間を介したアイデンティティ交渉が、どのように制度的、空間的設計の影響を受けるのかに着目することで、多様化が進む教育環境を整備する際、生徒たちが肯定的なアイデンティティや関係性を築くための教育計画や教育環境整備における実践的な示唆へとつながると考える。また、より学際的かつ批判的な理論や分析アプローチを用いてアイデンティティ研究を統合的に発展させることで、さらなる研究的枠組み形成への手がかりとしたい。

<引用論文>

渋谷真樹. (2001). 「帰国子女」の位置取りの政治: 帰国子女教育学級の差異のエスノグラフィ. 勁草書房.

箕浦康子. (1988). 日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程: 帰国者への象徴的相互作用論アプローチ (<特集> 海外帰国子女の心理学的課題). 社会心理学研究, 3(2), 3-11.

Delaney, D. (2002). The space that race makes. *The professional geographer*, 54(1), 6-14.

Heller, M. (1987). The role of language in the formation of ethnic identity. *Children's ethnic socialization*, 180-200.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Shao-Kobayashi, Satoko	4. 巻 1
2. 論文標題 “Who’s Pitiful Now?” : Othering and Identity Shifts of Japanese Youth from California to Tokyo.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Diaspora, Indigenous, and Minority Education	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1080/15595692.2018.1438391	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shao-Kobayashi, Satoko	4. 巻 1
2. 論文標題 Mapping Imagined Boundaries: Researching Linguistic and Spatial Practices of Othering at a Japanese University Campus	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 New Ideas in East Asian Studies	6. 最初と最後の頁 62-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) TBA	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林 聡子	4. 巻 10
2. 論文標題 アイデンティティと協働性：空間と言語がつくる境目と境界線の身体化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国際教育	6. 最初と最後の頁 21 - 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 小林聡子
2. 発表標題 補習校との狭間で - ライフストーリーにおける名乗りと名付けの 相互行為的分析 -
3. 学会等名 異文化間教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Satoko Shao-Kobayashi
2. 発表標題 From “Jap” in California to “Kikoku” in Tokyo: Intra-ethnic Othering and Identity Shift
3. 学会等名 26th Symposium About Language and Society, Austin, University of Texas, Austin, USA (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林 聡子
2. 発表標題 想像する異文化間の境界：大学における空間と言語を用いた他者化
3. 学会等名 異文化間教育学会 新潟大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Satoko Shao-Kobayashi
2. 発表標題 Mapping “Us” and “Others” : Identity Negotiation among Local and International Students at a Japanese University Campus
3. 学会等名 European Conference on Educational Research, Free University of Bolzano, Italy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林聡子
2. 発表標題 日本人（元）高校生のアイデンティティ交渉における空間と言語の役割
3. 学会等名 異文化間教育学会第38回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Satoko Shao-Kobayashi
2. 発表標題 Border and boundaries: A critical approach to linguistic and spatial practices at a Japanese university campus
3. 学会等名 British Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林聡子
2. 発表標題 駐米日本人高校生と教育空間：民族アイデンティティの言説的・空間的位置付け
3. 学会等名 移民研究シンポジウム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考